

第四十七回評論賞

「詩的純度の高い歌」

「コスモス」2024年10月号掲載

千葉
伊沢ざわ
玲りょう

伊沢玲の評論について

伊沢玲さんの評論は、歌を読む姿勢を問うことから始まる。鈴木加成太の第一歌集『うすがみの銀河』について「あらためて一首ずつの歌を、間隔を置いて、一編の詩のようにゆっくり味わいたいと感じる歌集」と述べて、この歌集との出会いにより伊沢さんが希求する読み方が実現したことが、論の起点であると示す。

『うすがみの銀河』を読み進めつつ、一首一首の表現と向き合うことで得たものを的確な言葉で読者に手渡して、書きながら論を深めている。分析とは違う独自の考察がこの論の核である。鈴木加成太の作品にある特質を、詩的であると簡単に言わずに、詩的純度の高い歌であると言い、それを実証するた

めに十七首の作品を選び丁寧に読み解いてゆく。

缶珈琲のタブ引き起こす一瞬にたちこめる湖水地方の夜霧
この歌について「生活の中のごくありふれた行為から歌が生まれている。寒いときに缶珈琲を開けると濃い湯気がたちのぼるが、そこに作者が思い浮かべるのは、イングランド北西部の湖が連なる美しい溪谷の夜霧である。歌を詠む際、心を解き放ち、思いのままに発想を飛ばすことの楽しさを教えてくれる」と述べている。

椅子高き深夜のカフェに睡りゆく銀河監視員の孤独を真似て

この歌の「銀河監視員」という語に着目し、「カフェの腰高の椅子に座ると、足が床に届かないからか、どこにも所属していないような、心許ない感覚をおぼえる。また、ビーチサイド

の監視員も然り。遠くまで見渡せる高い椅子に座り、楽しそうに遊んでいる人たちから離れた立場で、ひとり任務に当たる。

「銀河監視員」という言葉は、無限に広がる空間と向き合う、途方もない孤独感を思わせる。この言葉を生み出した作者の想像力はどこから生まれるのだろうか。孤独を強く意識する、詩の源泉を思う」と、鈴木 of 創作の原点をも探る鑑賞をしている。掻き消すためのことばをつかふ日のをはり灯ともしに痺れ蛾がまはりある

この歌については「掻き消されるのは言葉であり、その言葉を生んだ人の心でもある。それらを、まるで気が触れたかのよ

うに明かりに群がって飛び回り、翌朝には死んでしまう蛾に象徴させて切ない」と言い、現実世界へ向けられる作者の眼差しの鋭さを指摘する。

歌集に並ぶ歌を言葉に即して読み、緻密でねばり強い解釈により、作者の作品を真に感受し、共鳴することの大切さを、この論によりあらためて知る。「自分らしさの核となる、原石のような感性を持ち続ける」という創作態度を、鈴木加成太の作品に見出すまでの鑑賞が優れている。

一冊の歌集を時間をかけて読み、その作品世界を味わうことの豊かさに気づかせてくれる重厚な評論だと思ふ。



伊沢 玲

感想

「詩的純度の高い歌」というテーマを選んだきっかけは、毎月楽しみに出席している東京歌会の勉強タイムでした。コスモスという素晴らしい学びの場で、多くの教えと励ましをいただき、つねに新しい刺激を受けながら短歌を続けてこられたことを、皆様にあためて感謝申し上げます。

略歴

一九六〇年 宮城県生まれ
二〇〇五年 コスモス短歌会入会
二〇一五年 灯船の会入会
二〇一八年 第六十四回〇先生賞受賞

《選考過程》

選考団に推薦を求め、高野・影山・桑原・狩野・小島ゆ・木畑・大松・田宮・津金・福士・藤野・風間・田中・水上比・鈴木竹・原賀・水上美・大野・松尾・鈴木千・小島な・小田部・斉藤の各氏から回答があった。被推

薦者は八篇であった。

推薦の内訳（一人1点）は、伊沢玲「詩的純度の高い歌」8点、白川ユウコ「クルマの短歌」4点、吉田史子「観る人の孤独」4点、中村仁彦「宮柵二のふるさと詠」2点、谷真樹「心理学の視点から読む 怒りの短歌」1

点、早川晃史「風間博夫『動かぬ画鋏』を読む」1点、百留ななみ「直ぐなる静観」1点、早川昌成「実朝の獨創性」1点、であった。これを二月十五日、編集部で検討した結果、伊沢玲の受賞が決まった。